

《巻頭言》

ミッションの再定義に基づく研究力と人材育成の強化

研究機構長 山口 宏樹

2012年6月に文部科学省によって示された「大学改革実行プラン」を契機に、埼玉大学は教育学部、工学部、教養学部、経済学部、理学部の順で、ミッションの再定義を積極的に行って来ました。国立大学によってその捉え方に温度差が少なからずあるものの、また政権が交代したことも影響してか、文部科学省のトーンもやや変化したようにも思えますが、埼玉大学としては各学部や各研究科の強み、特色や社会的役割、さらには「弱み」を明確にすることができ、学部の枠を越えた再編・連携による大学改革を意図して「埼玉大学強化戦略」を作り上げることができました。埼玉大学は今、まさに大きく動こうとしている状況にあります。

その動きの一つは、リサーチ・ユニバーシティとしての、強みを有する研究分野への資源集中による研究力強化です。具体的には、理工学研究科の教員組織である研究部に、ミッションの再定義により強みを有する研究分野として特定した3領域からなる戦略的研究部門を新設し、埼玉大学における戦略的・組織的研究を推進します。そのため、理工学研究科の既存の6研究部門に所属する既存の教員の中から、3研究領域に関連して研究力の高い教員を選抜し戦略的研究部門に配置するとともに、世界展開を視野に入れた研究力強化を促進するため、また戦略的研究部門や研究領域の硬直化を避けるために、新たに外国人教員を採用して定常的に入れ替えていくことも検討しています。

もう一つの動きは人材育成の強化、取り分け、科学分析支援センターに関わるものとしては理工系人材育成の量的・質的強化です。理工学研究科博士前期課程の入学定員を段階的に大幅増員して、理工系人材の育成を量的に強化するとともに、学士・博士前期課程を通じた6年一貫カリキュラムの導入により、その質的な強化も図ります。6年一貫とすることで教育の自由度を増やすことができ、例えば、海外大学との研究室交流(Lab-to-Lab 教育プログラム)により戦略構築力と国際化対応力を備えた理工系グローバル人材の育成も可能となります。

いずれの動きにとっても重要となるのが研究・教育環境の整備であって、研究用・教育用分析機器を数多く有する科学分析支援センターの役割が重みを増すとともに、その充実を図っていかなくてはなりません。研究力強化のために新たに外部から、外国人研究者も含めて採用する場合に、研究用設備が充実しているか否かは一つの重要な要件となります。また、質の高い理工系人材の育成には、研究を通じた教育、つまりリサーチ・リテラシーを身に付けさせるような教育の重要性がより一層高まります。研究と、研究を通じた教育を支援する組織としての科学分析支援センターのミッションを再度、しっかりと認識しなくてはなりません。

「啐啄(そったく)の機」という言葉があるそうです。鳥の雛が卵の殻を破ってかえろうとするとき、雛が内からつつくのが「啐(そつ)」、母鳥が外からつつくのが「啄(たく)」。もともと禅の言葉で、「機を得て両者相応じる得難い好機」のことを意味するそうです。埼玉大学は今、まさにこの状況にあるように思います。種々議論はあるでしょうが、つつく力が外から加わっているのに、孵化する機会を逃してしまうことのないようにしたいものです。